日本と韓国のしつけ文化

―『クレヨンしんちゃん』の表現に対する母親の反応から―

金　仙　美

従来、日本における文化の比較研究では、日本と欧米との比較が主たる研究であった。もちろん、日本と東アジアとの比較研究もされていたものの、まだ日本と韓国の比較研究は乏しい。日本と韓国の場合、外見が似ていることや儒教という同じ伝統思想を持っていることなど、両国は類似しているという考えに陥りやすい。しかし、このような先入観はお互いを理解することにおいて、差し障りが起こる要因になると思われる。ここでは、子どもの教育における日韓比較を通して、儒教の影響を受けた伝統教育思想が日本と韓国の教育にどのように受け継がれ、どういう変化をもたらしているのかを検討する。特に、現代社会において、子どもの遊び文化の一つである「マンガ」を用いて、韓国人母親と日本人母親の反応を検討することで、文化の影響による「教育意識の違い」と「教育意識の変容」を考察することを目的とする。

キーワード：母親、教育意識、日韓、しつけ文化、親子関係

Ⅰ．はじめに

日本と韓国は、地理的・歴史的に共通する背景に加え、両国は似たような文化的、社会的、制度的枠組みを持っている（清水純、1994）。特に儒教的遺産とその強い文化的影響を共有していると思われる。森嶋通夫（1982）は、日本と韓国における儒教はそれぞれの度合は異なっても、忠誠心や孝行、仁愛、信義、勇気といった資質に重きをおいていると述べている。重要な違いは、韓国の儒教は仁愛が最も重要であるのに対し、日本の儒教は忠誠心が中心であると結論づけている。これについて清水（1994）は、日本は忠誠心に最大の重きを置き、孝行さえ国家への忠誠の下位に置いた。また、仁愛や家族、親族、友人への道徳的義務は特に尊重しない。日本の社会では社会階級制度が徹底しているため、日本人にとって忠誠心は孝行よりはるかに優先されるのであると言及している。一方、徐正基（2000）は、韓国で最も発展した朝鮮時代の儒教について、「春秋精神」の影響を受け、国に忠誠し、親に孝行することを同時に志向していたと述べている。同じ儒教文化と言っても、このように何を中心とするかの違いは、両国の異なる社会の特性として表われると考えられる。

さて、家庭教育の中心思想や子どもへの期待は社会の形態や機能の変容とともに変化しつつある。

東北大学大学院教育学研究科　博士課程後期

まず、韓国の伝統家庭教育の中心原理は、孝と厳父慈母であると言っている（李桂学、2000）。孝は、子女が父母を恭敬する生活を通して、人格の実体である敬を確立していく方法的原理であって、厳父慈母は子女の正しい人格形成を目的とした子女教育の方法的原理であると述べている。一方、日本の場合、武士や一部の裕福な階層を除いて一般の家庭では、基本的生活習慣の形成や行儀作法などは、子どもにきびしくしつけることはなかった（広田照幸、1999）。なおかつ、礼儀作法や道徳より厳しくしつけられたのは労働のしつけであって、それを教えていたのは、家庭よりも地域社会に根をはっていた「共同体」であったと述べている。

このような伝統の教育思想が現在の親の意識にどのように受け継がれ表われるだろうか。「子どもと家族に関する国際比較調査」（総務庁青少年対策本部、1995）によると、子どもに望む性格について、日本人では「他人のことを思いやる心（62%）」「規則を守り、人に迷惑をかけない公共心（45%）」「責任感（40%）」と答えた。一方、韓国人は「礼儀正しさ（61%）」「責任感（58%）」「規則を守り、人に迷惑をかけない公共心（32%）」という結果であった。こういう結果は、日本の場合、人間関係重視教育が心がけられていることを意味していると思われる。また、それは家庭より地域社会という共同体で行われていた日本の教育形態が、常に他人と接する状況の中で、他人に気を配るという社会的性格として表われたと考えられる。一方、韓国は、孝と敬を根本にした礼儀を重視する教育であると考えられる。これは、韓国の伝統教育思想が現在にも強く残り、影響を与えているためであると思われる。以上のように、日本と韓国は急激な社会の変化にもかかわらず、今でもなお伝統教育思想が現代の親の教育意識に影響を与えていると考えられる。

本研究では、現代社会において、子どもの遊び文化の一つである「マンガ」を用いて、親の子どもに対する教育意識を検討することとした。特に、日本と韓国社会の近代性と伝統性という二重構造（熊谷文枝、1994）の中で、現在まで残っている意識と変化している意識の日本と韓国の違いを検討したいと思う。

日本の世論調査（読売新聞、2003）によると、『クレヨンしんちゃん』のアニメは最も子どもに見せたくない番組である。韓国で行った調査（金仙美、2001）でも、最も子どもに見せたくないアニメは『クレヨンしんちゃん』であった。しかし、その調査で、日本人と韓国人の意識を比較した結果、日本人と韓国人で有意差がみられた（$p<.01$）。つまり、韓国人親の方が日本人親より子どもに見せたくない意識が多いという結果が得られた。このようなことから、日本人親と韓国人親では「教育意識の違い」があることが予想される。本研究では、『クレヨンしんちゃん』のマンガを用いて、韓国人母親と日本人母親の反応を検討することで、文化の影響による「教育意識の違い」と「教育意識の変容」を考察したいと思う。

II．方法

1．調査対象

小学校高学年（4、5、6年生）の子女を持つ母親である。有効回答数は、日本81名、韓国76名で、平均年齢は、日本39.05歳、韓国39.04歳であった。子どもの年齢は、日本10.57歳、韓国11.89

歳であった。子女の性別は、日本男42名、女39名、韓国男31名、女45名であった。子どもの数は、日本2.22名、韓国2.06名である。

２．手続き

調査は韓国の小学校（２ヶ所）と日本の小学校（２ヶ所）に依頼し、質問紙を配布・回収した。

質問紙は『クレヨンしんちゃん』のマンガの中から３つのストーリーを選び、そのコピーを提示し、子どもに見せるとしたら気になる所に、「気になる程度」と「気になる理由」の中から該当項目を記入させた。「気になる程度」は、「どちらかといえば望ましくない」、「望ましくない」、「絶対だめ」の３件法で回答を求めた。また、「気になる理由」では、「性的」、「暴力的（本研究では、乱暴な言葉づかい、すなわち言語による暴力を意味する）」「親子としてふさわしくない」「年齢にふさわしくない（本研究では、「大人らしくない」、または「子どもらしくない」ことを意味する）」「性別にふさわしくない」の５項目から回答させた。

Ⅲ．結果、及び考察

日本人母親と韓国人母親が「気になる内容」として答えた場面の数の平均をみると、日本は9.48±6.82個で、韓国は12.55±6.17個であった。

１．気になる理由

「気になる理由」の調査結果は、ストーリー別に分けて図1.1、図1.2、図1.3に示した。また、各理由項目における全体的な傾向を分析するため、ストーリー別の反応を合わせて図1.4に示した。

「気になる理由」における韓国と日本の答えの比率差を検定するために、x^2検定を実施した。その結果、各理由の項目において、有意な分布の差がみられた（x^2 (4) ＝43.246, p＜.01）。そこで、下位検定の残差分析を行った結果、表1.1のように、日本人では、「性別にふさわしくない」、韓国人では「親子としてふさわしくない」が有意に多かった。ここで「性別にふさわしくない」の項目は、関智子（1998）による、男女それぞれに期待される行動特性、外見的特性、性格的特性の全てを含む性役割の意味で扱う。

まず、韓国に比べて日本で「性別にふさわしくない」が有意に多かったのは、日本社会において、ジェンダーによる規範意識が韓国より強く働いたことに起因すると思われる。特に「男らしくない」という場面より「女らしくない」場面に対し、多く反応がみられたのは、女性に対するジェンダーの規範意識が強いことであると考えられる。片瀬一男（1996）は、「成功」「責任」といった「自律的な」行動様式は男の子に、「礼儀」「清潔」「配慮」といった「同調的な」行動様式は女の子に期待されると言っている。これは、儒教の「男女区別」思想の影響で、現在に至るまで日本も韓国もその影響を受けている。

堀田美保（2000）は、女性は全体的性役割観という問題について相対的に高い関与度を示し、自己意見としてより新しい性役割観を支持する者は男性に比べて多いと報告している。しかし、女性では新しい性役割観を支持している場合にも、依然として伝統的意見が多く、新しい意見は少ない

であろうと推測した。つまり、変化はまだまだであると感じていると言っている。また、「国民生活選好度調査」（夏刈康男、1994）にも、日本の場合、男の子に望む学歴は女の子に望む学歴より高いと報告している。つまり、日本社会において、男の子には勉強、女の子には生活の基本的な礼儀を重視する「伝統のジェンダー意識」がまだ強く残っていると考えられる。

一方、「韓国大学生の意識調査」（原岡一馬・洪光植、1998）によると、男女の対等、平等性に関して、韓国人大学生は日本人学生より強い意識を持つと報告している。また、職業と生活での役割、性差に関して、その区別を反対する態度においても日本より韓国が強いと報告されている。以上のことから、日本に比べて韓国の方が、男女区別や性役割に対する意識の変化が著しいと考えられる。

また、韓国人母親は女児より男児を好む傾向があるものの、成長の際、育児の性差、特に子どもの学歴への期待の差は見られないと言及されている（黄玉子、1982）。つまり、韓国は儒教の影響から受け継がれた男女差別が強く残されていて、まだ男児を好む傾向がある。しかし、子どもの将来の人生や子どもへの願望、期待においては性差がみられない。これは、ジェンダーに対する伝統的意識と変貌している社会を受け入れつつある近代的意識の二重構造の現れである。

以上のことから、日本と韓国において、「女らしさ」に対する期待意識も異なることと思われる。日本の場合、言葉づかい、姿勢など、人との関係からみられる「女らしさ」を重視し、それに対するしつけが教育の中心となる。一方、韓国は、根気や忍耐など内面の強さを「女らしさ」として強調すると考えられる。言葉や行動の描写が中心である「性別にふさわしくない」場面に対して、日本人の方が強く反応したのは、このようなことの影響であると思われる。また、両国の言葉からみても、韓国と違って女性語と男性語で区別されている日本は、男女区別の強い傾向が意識の背景に存在していると思われる。つまり、社会変化に伴い、親が子どものしつけにおいて重視する価値観が変わっていくなかジェンダーに対する意識も各々の変化している社会と文化を背景に変わりつつある。

次に、「親子としてふさわしくない」の項目をみると、日本と韓国は同じく儒教の影響を受けた社会にもかかわらず、有意に差がある。同じ儒教であっても、日本の儒教は忠誠心が中心であって、韓国の儒教は親に孝行することが最も重視された。「親子としてふさわしくない」に対する意識の差は、このように各々の社会で重視された思想の違いから影響を受けていると思われる。つまり、韓国は日本と比べて、儒教的な価値観の中で家族主義が強く残されていることを意味している。崔祥鎮（2000）は、韓国の家族関係、特に親子関係は社会の一般的な人間関係の倫理とは違い、差別化される特殊性を強く持っていると言っている。韓国では、親密な対人関係、つまり親子、君臣、夫婦のように、自分と特別な因縁がある人との倫理は一般人との対人関係倫理とその内容が違う。特に、韓国の親子関係は、孝と慈という伝統の儒教規範の強い影響を受けていると言及している。一方、日本の場合は、家族より共同体が重視されていたため、親子関係より他人との関係が重視されたと思われる。

韓国と日本において、子どもの数の減少と都市への人口移動による家族の規模の小型化は、家族志向の漸減をもたらし、家族に対する意識が変わりつつある。しかし、韓国人母親で「親子としてふさわしくない」の項目に反応が得られたのは、目上の人に対する礼儀を重視する社会規範から生

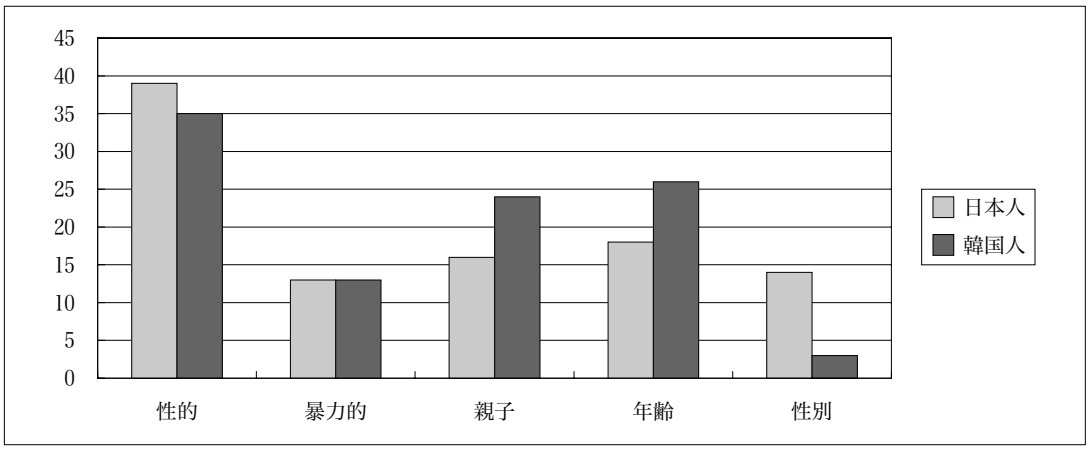

図1.1　ストーリー１における「気になる理由」（重複あり）

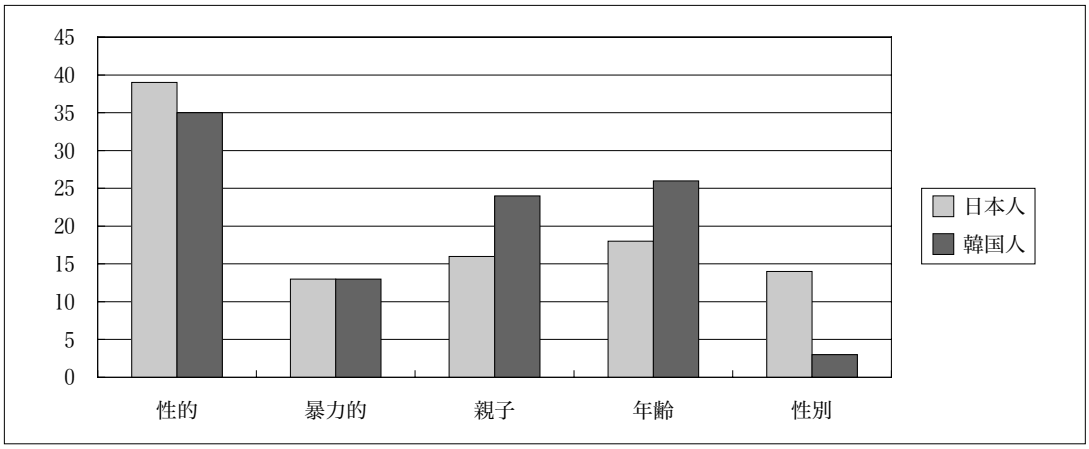

図1.2 ストーリー２における「気になる理由」（重複あり）

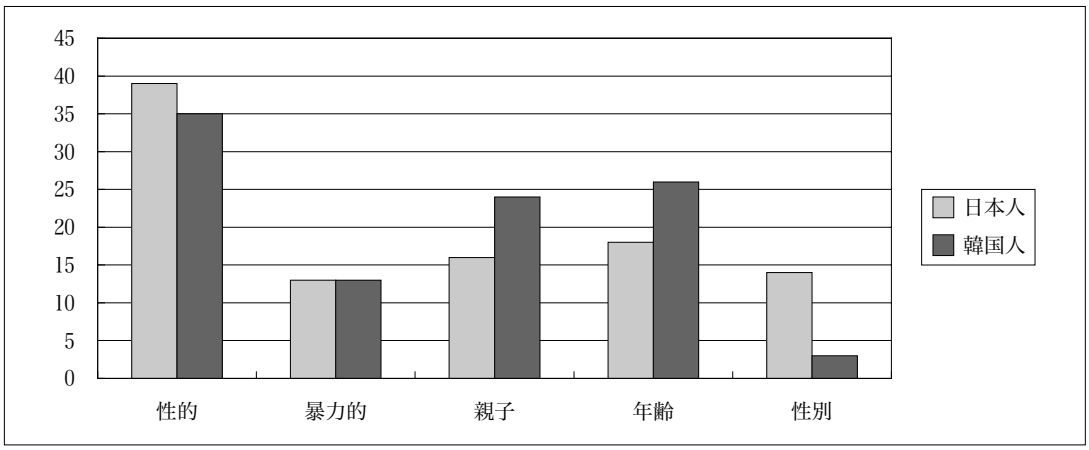

図1.3 ストーリー３における「気になる理由」（重複あり）

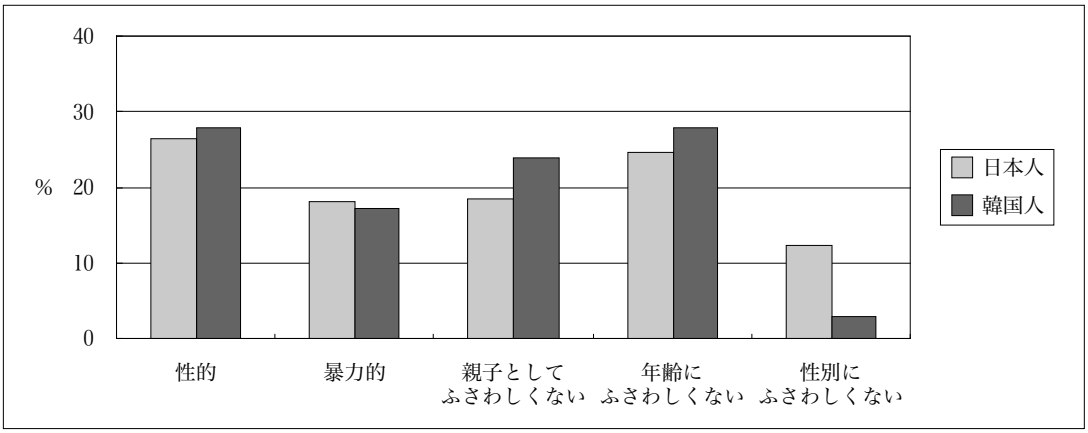

図1.4 「気になる理由」の全体傾向（重複あり）

表1.1 図1.4の調整された残差

	性 的	暴力的	親子として ふさわしくない	年齢に ふさわしくない	性別に ふさわしくない
日本人	-0.594	0.435	-2.311*	-1.326	6.342**
韓国人	0.594	-0.435	2.311*	1.326	-6.342**

*p＜.05、**p＜.01

じた価値観が働いたと判断される。つまり、親子関係において、韓国は日本より伝統性がまだ強く残っていると考えられる。

2．気になる程度

「気になる程度」の調査結果は図2.1に示した。「気になる程度」における韓国と日本の反応の比率差を検定するために、x^2検定を行った。その結果、各程度の項目において、有意な分布の差がみられた（x^2 (2) ＝36.743, p＜.01)。そこで、下位検定の残差分析を行った結果、表2.1のように、日本人の場合には「どちらかといえば望ましくない」と「望ましくない」、韓国人は「絶対だめ」が有意に多かった。

「家庭と地域の教育力に関する世論調査」では、最近、家庭のしつけや教育する力が低下しているという見方がある（総理部、1988)。家庭のしつけが衰退しているというイメージは、政府の審議会でもマスコミでも世論でも、常識となっている（広田照幸、1999)。日本の親と韓国の親を比較したところ、韓国の親より、日本の親が子どもに注意しないということが報告されている（財団法人日本青少年研究所、2001)。つまり、日本の親は韓国の親より、子どもの社会化から手を引いていると考えられる。韓国でも子どものしつけの衰退という社会傾向はみられるものの、子どもへの教育期待が高いことや今でもなお儒教の思想が根強く残っているという韓国社会の特性は、子どものしつけにおいて許せる範囲が厳しく、ここでも「絶対だめ」という強い意識で表われたと思われる。つまり、韓国の母親は、日本の母親より子どもの教育に対する判断基準が厳しいと思われる。

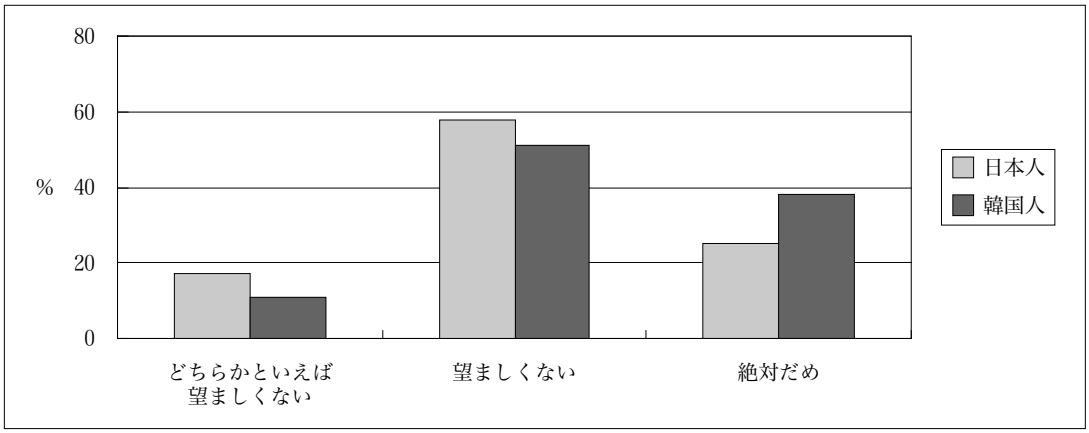

図2.1 「気になる程度」の全体傾向（重数あり）

表2.1　図2.1の調整された残差

	「どちらかといえば望ましくない」	「望ましくない」	「絶対だめ」
日本人	3.526**	2.927**	-5.706**
韓国人	-3.526**	-2.927**	5.706**

**p<.01

3.「気になる理由」と「気になる程度」との関係

「気になる理由」の項目ごとに「気になる程度」を分けて分析し、図3.1に示した。また、理由ごとに、日本人と韓国人における気になる程度の比率の差を検定するため、x^2検定を行った。その結果、「性的」（x^2 (2) =61.212、p<.01)、「暴力的」（x^2 (2) =18.84、p<.01)、「性別にふさわしくない」（x^2 (2) =6.063、p<.05）において有意差がみられた。そこで、下位検定の残差分析を行った。その結果、まず、「性的」をみると、表3.1のように、日本人は「どちらかといえば望ましくない」と「望ましくない」が、韓国人の場合には「絶対だめ」が有意に多かった。次に、表3.2の「暴力的」の場合、日本人では「どちらかといえば望ましくない」が、韓国人では「絶対だめ」が有意に多い。最後に、「性別にふさわしくない」をみると、表3.3のように、日本人では「望ましくない」が、韓国人では「絶対だめ」が有意に多かった。

まず、「性的」の項目の結果をみると、日本人より韓国人の判断基準が厳しいことと思われる。日本は、1960年代から性の解放が急速に進行していたと報告されている（NHK世論調査、1991)。このような性に関する解放には、映像、文学作品、マンガなどあらゆるメディアの性的な刺激の氾濫という背景があった。また、「家」制度が廃止され、女性の経済的自立が進み、男性の経済力に依存する従属的結婚と性の関係が問い直されるようになったこと、地域社会や家族の人間関係の希薄化に伴って性に対する規制が弱まってきたこと、などがその背景であると指摘している。つまり、日本人の場合、「性的」場面に対して反応があったものの、その意識は強くなかった。一方、韓国人の場合、従来の儒教において男女区別という男女関係に対する意識が、韓国社会では男女差別に歪曲

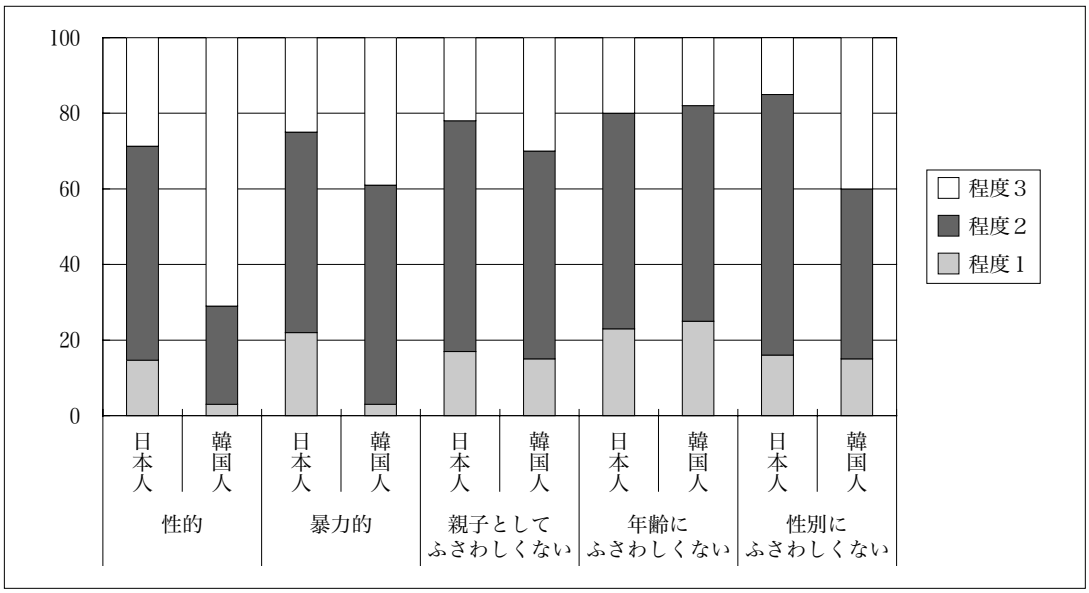

図3.1　各理由別の気になる程度の割合の分布（重数あり）

表3.1　「性的」における気になる程度の割合の調整された残差

	「どちらかといえば望ましくない」	「望ましくない」	「絶対だめ」
日本人	3.784**	5.749**	-7.692**
韓国人	-3.784**	-5.749**	7.692**

**p < .01

表3.2　「暴力的」における気になる程度の割合の調整された残差

	「どちらかといえば望ましくない」	「望ましくない」	「絶対だめ」
日本人	4.208**	-0.769	-2.112*
韓国人	-4.208**	0.769	2.112*

*p < .05　**p < .01

表3.3　「性別にふさわしくない」における気になる程度の割合の調整された残差

	「どちらかといえば望ましくない」	「望ましくない」	「絶対だめ」
日本人	0.151	1.925+	-2.429*
韓国人	-0.151	-1.925+	2.429*

+p < .10　*p < .05

されたので、性的なことに関しては男性より女性に対して厳しいのが事実である。つまり、「性的」場面では、女性の性に対する場面が多いため、韓国人にとって、許容し難しいことであると思われる。

次に、「暴力的」の項目の結果をみると、図1.4でみられるように、日本人と韓国人の反応の差は

なかったものの、その意識の程度には差があった。尚且つ、日本人では「どちらかといえば望ましくない」が、韓国人では「絶対だめ」が有意に多かったことは、「暴力的」場面において、日本人の許容範囲が韓国人より広いということが考えられる。

最後に、「性別にふさわしくない」の項目において、図1.4の結果では、ジェンダーに対する意識において、日本人の方が厳しい規範を持っていることがみられた。しかし、その程度をみると、韓国人母親は一般的にジェンダーに対する意識が厳しくないものの、その意識を持っている親の場合は、むしろ最も厳しい意識を持っている。つまり、変貌しつつある社会において、韓国人のジェンダーに対する意識は、伝統的意識と近代的意識の葛藤が顕著であると思われる。

４．気になる場面の日韓比較

まず、「性的」場面の場合には、両国とも、性的に身体を描写した場面で反応が多かった。特に、韓国において最も反応が多かった場面は、女性の身体をリアルに描いている場面であった。これには、韓国に受け継がれている儒教の特性が反映されていると思われる。従来の儒教において、男女区別であった男女関係に対する意識が、韓国社会では男女差別に歪曲されたので、性的なことに関しては男性より女性に対して厳しい。現在まで、女性の身体露出や性的な描写などが厳しく禁止されていたのが事実である。つまり、今でも韓国に残っている男女差別の意識の影響で、女性の身体をリアルに描写した場面に対して敏感な反応が示されたと思われる。ちなみに、テレビやマスコミにおいて女性を対象とした性的場面がみられるのは、韓国と比べて日本が明らかに多い。

「暴力的」場面においては、両国とも同じ場面で反応が多かった。しかし、表3.2のように、韓国人母親と日本人母親の間には許容程度の差があることがわかった。

「親子としてふさわしくない」場面において、日本人母親の場合、母親と子どもの関係が描写された場面で最も反応が多かった。一方、韓国人母親の場合、舅と嫁の関係が描写された場面で最も反応が多かった。日本の場合、母親と子どもの関係を気にしていることに対して、韓国は舅に対しての嫁の言語と行動を気にしている。これは、日本人が思う「家族」の範囲は親と子どもに限定していることに対して、韓国人の場合、「家族」の範囲は親の親、また、その親という広い範囲であることを示している。これは､韓国人に比べて日本人が家族の人間関係が希薄化していると考えられる。つまり、韓国と日本の「家族」に対する意識範囲に差があると判断される。

「年齢にふさわしくない」場面は、他の理由の場面に比べて、「性的」場面とともに、反応が多くみられた場面である。両国とも「子どもらしくない言葉づかい」が描かれた場面で反応が多かった。これは、子どものしつけや教育を考える親の意識が表われたと思われる。つまり、両国において、「子どもらしさ」に対する意識には差がないと思われる。

「性別にふさわしくない」場面では、両国とも女性の乱暴な言葉づかいが描かれた場面で反応が多かった。これは、日本と韓国において、ジェンダーに対する意識の厳しさの差はあるものの、両国ともジェンダーに対する意識において、「女らしさ」を意識していることであると思われる。

気になる場面の比較において、日本人母親の場合、「性別にふさわしくない」場面で、最も反応が

多かった場面が、韓国人母親の場合、「親子としてふさわしくない」場面として最も多い反応がみられた。このように同じ場面に対して、異なる理由を選んだのは、日本人母親と韓国人母親において、優先する考えが異なるためであろう。つまり、日本人母親と韓国人母親の教育基準において、重視している教育意識が異なると思われる。

Ⅳ. まとめ

ここでは、日本人母親と韓国人母親の「教育意識の違い」という問題について、『クレヨンしんちゃん』のマンガを用いて、その反応を検討した。『クレヨンしんちゃん』のマンガを子どもに見せるとしたら「気になる理由」を分析したところ、日本人は「性別にふさわしくない」という項目で、韓国人は「親子としてふさわしくない」という項目で有意に多かった。

まず、日本と韓国において「性別にふさわしくない」の項目に差がみられたことは、両国の性別規範の意識に差があると判断される。韓国に比べて日本で「性別にふさわしくない」が有意に多かったのは、日本社会において、ジェンダーによる規範意識が韓国より強く働いたことと判断される。一方、韓国の場合、母親が女児より男児を好む傾向はあるものの、成長の際、育児の性差、特に子どもの学歴への期待の差は見られない。つまり、ジェンダー意識の伝統性と近代性の二重構造が顕著に現れるのである。

次に、「親子としてふさわしくない」の項目をみると、日本と韓国は同じく儒教の影響を受けた社会にもかかわらず、有意に差がある。同じ儒教であっても、日本は忠が中心であることに対して、韓国の儒教は親に孝行することが最も重視されたのが、それぞれの儒教の特性である。「親子としてふさわしくない」に対する意識の差は、このような意識の違いから影響を受けていると思われる。つまり、韓国は日本と比べて、儒教的家族主義が強く残されていることを意味している。

以上のように、日本と韓国において、子どもに見せるとしたら「気になる理由」の違いがみられたのは、両国の社会の行動基準の中で、重視されている意識が異なり、その影響の反映であると思われる。つまり、本研究の結果からみると、日本人母親はジェンダーによるしつけを重視しているに対して、韓国人母親は親や目上の人に対する礼儀を重視していると判断される。社会変化と伴って、親が子どもを社会化する際に重視する価値観も変わっている。また、そのなかで、ジェンダーや親子関係に対する意識も各々の社会と文化の変化を背景に変わりつつあると思われる。

次は、日本人母親と韓国人母親において、子どもに見せるとしたら「気になる程度」の分析をみると、日本人母親より、韓国人母親で「絶対だめ」の意識が多くみられた。これは、日本人母親は韓国人母親より、子どもの社会化から手を引いていることだと考えられる。つまり、韓国の母親は、日本の母親より子どもの教育に対する判断基準が厳しいと思われる。

また、「気になる理由」と「気になる程度」の関係を分析した結果、「性的」「暴力的」「性別にふさわしくない」の3項目において、韓国人母親の方が強い反応がみられたのは、日本人母親より韓国人母親の判断基準が厳しいと思われる。特に、「性別にふさわしくない」の項目において、一般的な韓国人母親の場合、ジェンダーに対する意識が厳しくなかったものの、その意識を持っている親

の場合には、むしろ最も厳しい意識を持っているということは、伝統的意識と近代的意識の葛藤を顕著に示すことだと思われる。

最後に、気になる場面を比較した結果、その反応にそれぞれの社会の特性が表われていることがわかった。特に、同じ場面に対して、日本人母親と韓国人母親が異なる理由を選んだのは、それぞれの教育基準において、重視している教育意識が異なることであると思われる。日本と韓国は、儒教という同じ伝統思想を持っていて、類似しているところも多い。しかし、両国は社会の特性や文化の背景によって、社会が重視している意識が異なる。また、このような異なる意識は、日本と韓国の「子どもの教育」に対する意識にも影響を与え、各々の独自的なしつけ文化を生み出している。つまり、韓国人母親に比べて日本人母親はジェンダーによるしつけを重視し、日本人母親に比べて韓国人母親は親や目上の人に対する礼儀を重視していることが分かった。さらに､以上の結果から、伝統性と近代性という二重構造の中で、社会の変化に伴い、子どものしつけも変容していることが予想された。

頻繁な異文化接触やグローバル化により、現代社会も激しく変貌していく今日、何よりこのような各国の異なる教育意識を理解することが先であろう。今後一層、異文化における子どもの教育研究もこのようなことを踏まえたうえで進めていくことが望まれる。

【参考・引用文献】

相良順子　2000　児童期の性役割態度の発達―柔軟性の観点から―　教育心理学研究、48

崔祥鎮　2000　韓国人의心理学　中央大学校出版部

原岡一馬・洪光植　1998　日本と韓国の社会的態度の比較研究―性役割態度の比較研究―　円光大学校教育問題研究所教育研究、17

服部祥子　1985　親と子―アメリカ・ソ連・日本―　新潮社

広田照幸　1999　日本人のしつけは衰退したか　講談社

堀田美保　2000　性役割に関する若者世代意見と新世代意見の分布認知　心理学研究、70-6

黄玉子　1982　母의 子女性差別에 관한 研究　又石大学校論文集、4

片瀬一男　1996　家族におけるジェンダー形成　「季刊子ども学」12、ベネッセ未来教育センター

金仙美　2002　異文化における子どもの価値観形成と適応―T.V.子ども番組が与える影響に関する日韓比較研究―　宮城教育大学大学院学校教育講座（編）教育論集、13

Michio Morisima　1982　Why Has Japan Succeeded? Western Technology and the Japanese Ethos. Cambridge. Cambridge University Press.

NHK世論調査部　1991　現代日本人の意識構造　日本放送出版協会

李桂学　2000　韓国의 伝統家庭教育과 宗教　宗教教育学研究、10、1

坂元慶行　2000　統計的日本人研究の半世紀―日本人の考えはどう変わったのか―　統計数理研究所

関智子　1998　「男らしさ」の心理学　裳華房

千石保　1984　いつ＜日本人＞になるか　小学館

清水純　1994　日本文化論への接近　日本大学精神文化研究所

総合研究開発機構　1989　諸外国と日本の家族構造と機能の比較研究　全国官報販売共同組合
徐正基　2000　朝鮮時代의 儒教　東洋文化研究所
総理部内閣総理大臣官報広報室　1988　家庭と地域の教育力に関する世論調査
鈴木敦子　1997　性役割―比較文化の視点から―　垣内出版株式会社
恒吉遼子・S.ブーコック　1997　育児の国際比較　日本放送出版協会
読売新聞　2003　見せたくない第１位「クレヨンしんちゃん」のフシギ　日本PTA全国協議会の調査　４月17日朝刊
㈶日本青少年研究所　2000　中学生・高校生の日常生活に関する調査報告書―日本・米国・中国の３カ国の比較―
㈶日本青少年研究所　2001　子どものしつけに関する調査報告書―日本・中国比較―

（本稿は東北心理学会第57回大会において発表した原稿に加筆したものである。）

Japanese and Korean Discipline Culture

From Mothers' Reactions toward Expressions of Crayon Shinchan

Sunmi KIM
(Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

The aim of this paper is to consider “the difference in educational consciousness” and “the transformation of educational consciousness” that has arisen from the cultural influence between Japanese and Korean mothers. In this paper reference has been made to Crayon Shinchan, the comic, one feature of play culture for children in Asia.

The results of educational consciousness analysis proved that significant differences exist in the items “not suitable for gender” and items “not suitable for parent and child” in Japan and Korea.

As it relates to items “not suitable for gender,” we can judge that consciousness of the gender model between the countries is different. The fact that results show Japan as having a significantly larger number of items “not suitable for gender” suggests that Japan has stronger standards toward gender, than Korea.

Conversely, results show Korea as having a larger number of items “ not suitable for parent and child.” This suggests that Japan has set comparatively high value on 'loyalty', whereas Korea has set higher value on 'piety for their parents'. These two particular items are characteristic of Confucianism. Hence in Korea, it can be said that Confucian Familism remains more prominent than in Japan.

Lastly, the reason for difference of choice in the same scene was analyzed in Japanese and Korean mothers. The results demonstrated that the standards of education are different between these two groups. Withstanding the fact that they share the tradition of Confucianism, the consciousness changes as a result of the background of each culture or the transfiguration of each society. This changeable consciousness affects the education of children and consequently produces different discipline culture.

Key words：Mother, education consciousness, Japan and Korea, discipline culture, parent and child